The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	片山忠雄教授御退官記念特集号によせて
Author(s)	林, 栄一
Citation	大阪外大英米研究, 9, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99006
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

片山忠雄教授退官記念特集号によせて

林　　栄　一

片山先生は、昭和５０年４月１日付でご退官になる。これは停年制度によるものであるから、どうにもお引き止めすることができない。できないことにこだわるよりも、むしろこの時点に達するまで鋭意ご尽瘁下さったことに対し満腔の謝意を表し、そこまでおすこやかにお勤めがあったことに対し衷心よりのお祝いを申しあげるべきであろう。割り切れないものを、どこかで割りきらねばならぬのが人の世の定めであってみれば、これは何でもないことであり、またそれが何でもなく行われることが、ありがたきことでもあるのだから。

しかし、それはりくつというものである。ロゴスとパトスはかみ合わない。片山先生が停年に達せられてご退官になることは、もちろん以前からわかっていたことではあるけれども、それが現実となって、われわれの前に立ちはだかった今、少くとも私はいたずらに周章狼狽するばかりである。これまで盤石のように微動だにしなかった英語学科の柱がなくなるのであるから、落ちついていろといわれても、それは無理というものだ。もちろんこれは「あまえ」であろう。しかし、それほどまでに頼らせるものが先生にはあるのである。

先生の学殖の深さは私ごときものがとてもはかることができないのだが、その幅の広さと、それを支える語学力のたしかさは、先生を知る人は、みな感歎して認めるところである。公式の履歴書には記載されていないが、先生は外語を卒業されてから、戦前の台湾において、台北帝大の矢野博士のもとで研究に没頭されたことがあり、これが今日の先生の大成をみる基礎を築いたと考えられる。難関を以てなる高等教員検定試験も先生にとっては何の障得でもなかったのである。特筆すべきは、アカデミックな研究もさることながら、先生の実際の英語を駆使する力は他に追随を許さないものをもっておられ、まさにミスター外語そのものといってよい。何をまかしても安心をしていられるお人柄は

謙虚で誠実であり、些事もおろそかにされることがない。決して軽挙妄動をせず、常に大局を見る遠慮深謀は一寸まねができないものがある。最近はご健康への配慮から控えておられるが、名にし負う土佐の産、酒はずいぶんとお好きで、以前はよくお伴をしたものである。静かなうちに、「いごっそう」である半面も、時にはかいまみた。

片山先生はそんな人である。私と先生は外語に奉職した時期があまりちがわなかった。もちろん、年令その他は大差あり、こちらはまだ尻の青い若造であったが、毛の生えた心臓にまかせて気やすくあつかましくいろいろなことでご迷惑をおかけした。あれから四半世紀は一瞬のうちに過ぎた。老田、本多、森沢、甲元の諸先生が去られたあと、大阪外大英語学科の主任教授として、その伝統の灯をゆるぎなく守り続けた巨木であった。しかし学校も変貌しつつある。古きよき時代は、ふりかえればいつもそうであるのかもしれないが、断絶したかなたに消え、今後は質的にはかなり変ったものになるかもしれないと思う。それはそれで新しい意義をもつであろうが、先生のご退官を直前に見ながら、胸中を去来する感慨のしきりなるものがある。

片山先生のご退官にあたり、ささやかながら、本誌の第9号を特集号として先生に捧げることにした。今後とも変らぬご指導ご鞭撻をお願い申し上げ、先生のご健康をお祈りする。